

吉備国際大学研究紀要  
 (人文・社会科学系)  
 増刊号, 175-180, 2017

## 看護科高等学校教員の研修ニーズに関する研究

清水 菜月・池永理恵子・和泉とみ代

### Needs of high school nursing teachers

Natsuki SHIMIZU, Rieko IKENAGA, Tomiyo IZUMI

#### Abstract

Questionnaire survey to investigate the training needs of teachers high school nursing department. We investigated how to think there is a method We found that any teachers perceive difficulties in guiding students, handling parents and guardians, and providing practical training. Despite this, many answered that it was good to become a high school teacher once a relationship of trust with the students was established. Future training improvements are necessary.

**Key words** : high school, nursing, training needs, teachers

**キーワード** : 看護科高等学校 研修ニーズ

### I. はじめに

わが国の看護師養成制度は看護系大学、養成3年または2年の看護専門学校及び短大、専攻科を設置した5年一貫過程の高等学校教育など、多様な教育形態がある。少子高齢化や高度医療の専門家が進む中で看護師はますます高い専門性を求められている。

こうした社会背景の中で、平成14(2002)年に文部科学省は看護科をもつ高等学校においては専攻科を設置し、5年一貫教育の方針を打ち出した<sup>1)</sup>。これにより、

それまで高等学校3年間で准看護師資格を取得し、進学課程2年間で看護師国家試験受験資格を取得させるという、2段階であったものが、高等学校において5年間で養成することが可能となった。しかし、高等学校教諭一種免許状(看護)の課程認定大学は、全国で15校と僅かである<sup>2)</sup>。看護科の教員免許状取得者の割合は、公立では52.3%、私立では37.1%であり、看護科高等学校の教員は全国的に深刻な人材不足が継続している状況にある<sup>3)</sup>。そのため、多くの看護科高等学校

では臨床経験を有する看護師に臨時免許を交付して教員不足を捕っている現状にある。先行研究では、看護科高等学校の教員が教育的な指導や授業力に不安を感じていることが報告されている<sup>4)</sup>。しかし、看護科高等学校教員の教育実践上の課題や研修に関する研究はほとんど見当たらない。高等学校教育の中にありながら、教員免許状の取得者が少ないという、特有の課題を抱える看護科高等学校教員の研修ニーズの明確化は緊喫の課題であると考えられる。看護科教員の教科指導に関する国内の看護科高等学校を対象とした全数調査では、看護科教員免許状取得者は公立で52.3%、私立で37.1%であった。そのほとんどが臨時免許状取得者であり、教員の定着率も低い。また、教員の多くが教科指導に関する知識が不足しており、教科指導に多くの教員が不安を抱えている実態が明らかにされている<sup>2)</sup>。

看護科高等学校教員の人材確保と人材育成において、全国の高等学校が教員確保に苦慮している実態があり、その対策として臨床経験を有する看護師を教員として採用している。看護師の資格のみの教員は教授法や教科指導に戸惑いを感じており、看護科教員の人材確保と人材育成の在り方の研究が必要とされる<sup>3)</sup>。

その一方、看護科高等学校の教育は、高等学校産業教育の中の希少科目であるが、看護師国家試験合格率も高く、卒業生のほとんどが看護師として地域医療に従事しており、社会的貢献度は非常に高い。

そこで今回は看護科高等学校教員の教育実践上の困難と課題について着目し、教育実践におけるやりがいや困難、課題を明らかにしたいと考え、看護科高等学校教員の研修ニーズについて検討することとした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象者

調査対象者は、近畿地区のO市内にあるA看護科高等学校に勤務している教員10名とした。

### 2. 調査方法

無記名自記式調査法による質問紙調査とした。平成28年5月にA看護科高等学校教員を対象とした研修会を実施し、終了後、振り返りの自由記述をしてもらった。その記述内容と先行文献<sup>2)</sup>を参考として調査票を作成した。プレテスト実施後、調査票の修正を行った。調査にあたっては、A高等学校校長に電話と書面による説明を行ない、実施の承諾を得た後、調査票を送付した。調査協力については個人の自由意志を尊重するものとし、協力の有無による不利益は生じないことを校長から伝えてもらうよう、書面で依頼した。調査票は2週間留め置きとし、個人用の封筒に入れ、返信用の封書にて郵送してもらい、回収した。

### 3. 調査期間

平成29年2月～3月の期間とした。

### 4. 調査内容

- 1 看護科高等学校教員として勤務して感じた困難や戸惑い
- 2 看護科高等学校教員として勤務して感じた充実感や手応え
- 3 看護科高等学校の教育を実践する上で感じている課題とその解決方法

### 5. 分析方法

数値データは統計的処理を行って分析を行い、記述データは内容分析を行う。

### 6. 倫理的配慮

事例提供者である教員の所属長及び看護科教員に対して研究の主旨やプライバシー及び個人情報の保護及び教員の自由意思による参加であること、データを研究以外の目的で使用しないことや収集したデータの持ち出しもしないことを文書と口頭で説明し、同意を得た。データは記号化して個人が特定できないよう扱い、厳重に管理した。調査の実施にあたっては、吉備国際大学倫理審査委員会の承認を得た（承認番号16-51）。

表1 対象者の基本属性

対象	性別	年齢	高等学校教員としての勤務年数	教員免許状	看護師免許	病院等での臨床経験	最終学歴
A	女	50代	3年	無	有	33年	大学（看護系）
B	女	50代	1年	無	有	35年	大学（看護系以外）
C	女	60代	2年	無	有	37年	大学（看護系以外）
D	女	20代	3年	有	有	無	大学（看護系）
E	女	40代	0.5年	無	有	18年	看護専門学校
F	女	60代	2年	無	有	40年	看護専門学校
G	女	30代	2年	無	有	10年	看護専門学校
H	女	50代	1.9年	無	有	31年	看護専門学校

### Ⅲ. 結果

対象者10名のうち8名の回答を得た（回収率80%）。有効回答8名（有効回答率は100%）を分析対象とした。

#### 1. 対象者の属性

対象者の基本属性を表1に示す。調査対象者の年代は、50代3名（37.5%）が最も多く、次いで60代2名（25.0%）、40代、30代、20代がそれぞれ1名であった。平均年齢は45.0歳（SD14.14）であった。高等学校教員としての経験は、2年が3名（37.5%）、3年が2名（25.0%）、1.9年が1名、1名が1名、0.5年が1名で、全員が3年未満であった。教員経験の平均年数は1.9年（SD0.86）であった。教員免許状保有者は8名中1名のみであった。看護師免許は全員保有していた。看護師としての臨床経験年数は、30年以上が5名（62.5%）、10年以上が2名、経験無しが1名あった。最終学歴は看護専門学校が4名（50%）で、看護系大学が2名、看護系以外の大学が2名であった。

#### 2. 看護科高等学校教員として勤務して困ったこと、戸惑ったこと

看護科高等学校教員として勤務して困ったこと、戸惑ったこととして、校則違反などの生徒対応、保護者対応の項目が最も多く、次いで授業をすること、生徒

の臨地実習指導に関わることについての項目があげられていた。看護科高等学校教員として勤務して困ったこと、戸惑ったことの11項目間の大きな差はみられなかった。全体として、生徒・保護者の対応に対する項目に困難を感じている傾向がみられた。（図1）

#### 3. 看護科高等学校教員として勤務して良かったことについて

看護科高等学校教員として勤務して良かったこととして最も多かった項目は生徒との信頼関係があげられていた。次いで、臨地・臨床実習指導者との連携が効果的にできた、生徒の教育効果が現れた、授業の自信が持てた、保護者との信頼関係ができたなどの項目が挙げられた。特に生徒との関係づくりができたことに良かった点がほかの項目と比較して大きい差がみられた。（図2）

#### 4. 看護科高等学校教員に関わる課題について

看護科高等学校教員に関わる課題について最も多く回答が得られた項目は、教員の人数が少ないこと、であった。次いで教員として研修が不十分であるという項目が多かった。教員の仕事が多忙であることや、多忙であるために授業や実習に影響がある、という項目

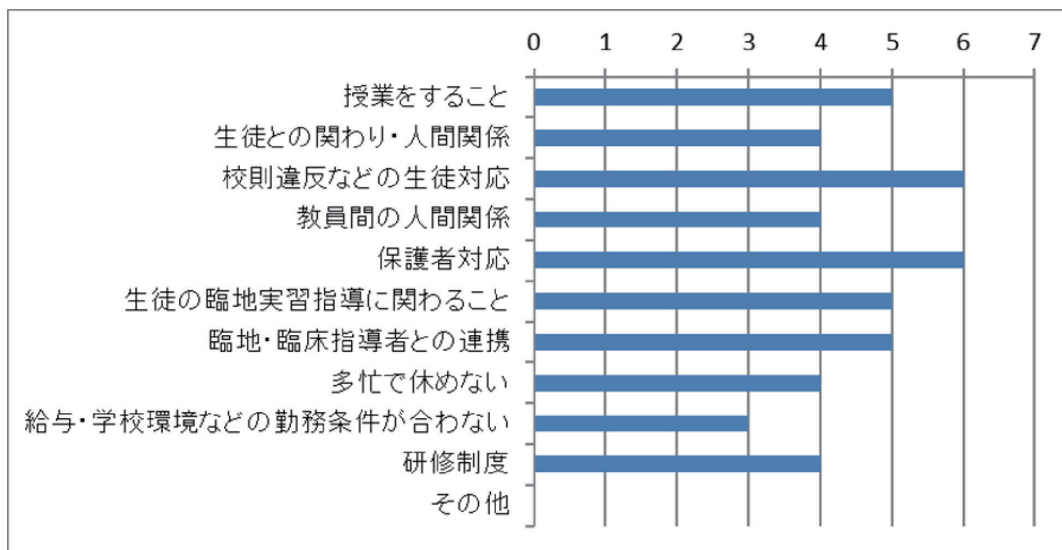


図1 看護科高等学校教員として勤務して困ったこと、戸惑ったこと

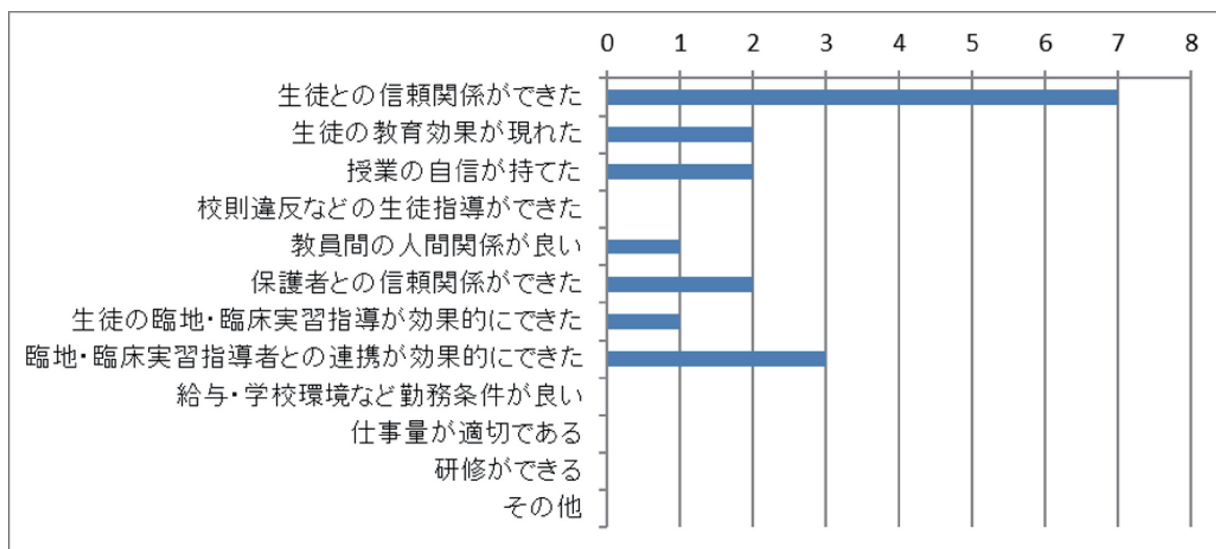


図2 看護科高等学校教員として勤務して良かったことについて

があげられていた。人数が少ないことや多忙であること、研修が不十分であることが課題としてあがっていた。また、授業内容が高校生には難しいことや臨地実習の指導が困難であること、保護者対応の困難さもあげられており、その他以外の全ての項目が課題としてあげられていた。(図3)

### 5. 看護科高等学校教員に関わる課題についてどのような解決方法があると思うか

看護科高等学校教員に関する課題の解決方法として、もっとも多かったのは大学との連携などにより、看護科高等学校教員の教育研修制度を充実するが8人中

7人であり、次いで大学等で看護科高等学校教員の資格を取りやすくする、という項目があげられていた。また、看護科高等学校教員の資格に繋がる認定制度を新設する、といった教員数を確保するための方策があげられていた。また、学校行事等を充実させて高校生としての教育活動の充実も解決方法としてあげられており、看護の専門教育だけでなく、高校生として充実した学校生活を送ることの必要性を感じていることが伺えた。(図4)

### 6. 考察

調査対象者は全員が看護師免許保有者であったが、

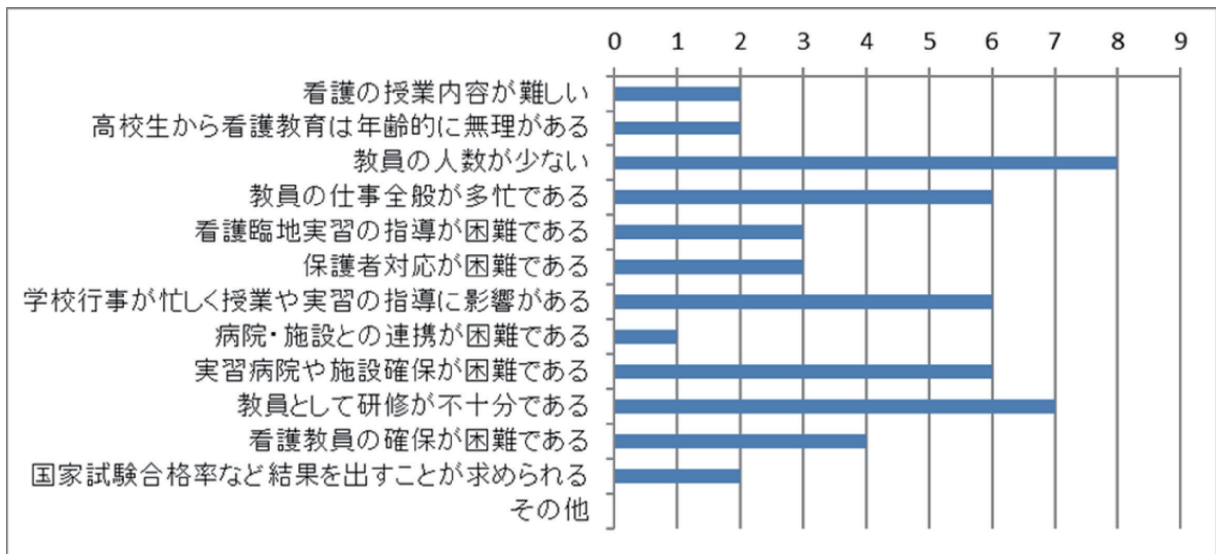


図3 看護科高等学校教員に関わる課題について

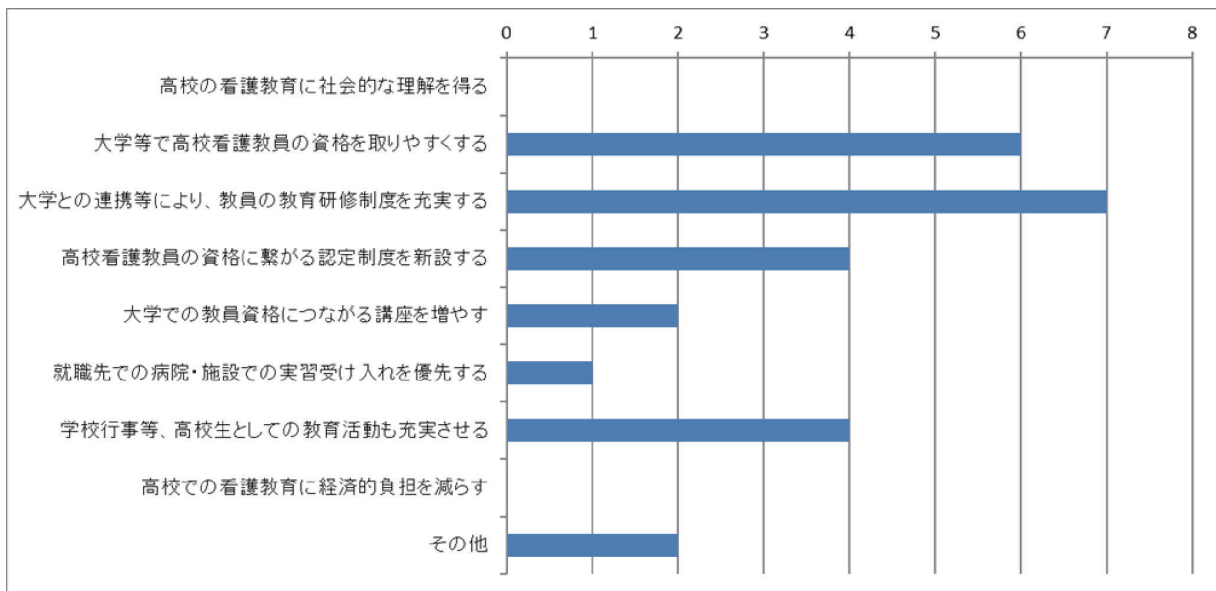


図4 看護科高等学校教員に関わる課題についてどのような解決方法があると思うか

ほとんどが教員免許状を有しない、臨時免許状による教員としての位置づけであった。また、半数以上が50代以上で、30年以上の臨床経験者であった。しかし、高等学校教員としての勤務年数は平均1.9年であった。このことから、高等学校における看護科教員のほとんどが臨床経験豊かな熟練看護師であったが、教員としての勤務が短期間である状況が明らかとなった。また、看護科高等学校教員として勤務して感じた困難や戸惑いでは、校則違反などの生徒指導や保護者対応、授業をすることの項目が多かった。また、臨地実習指導や臨床指導者との連携など、病院等での実習指

導に関することでも戸惑いを感じていた。日下は、5年間の高等学校教育の中で、長期にわたり、看護の視点や思想を伝えることは大学や大学院教育ですら容易でない、としている<sup>1)</sup>。看護科高等学校では、普通教科に加えて看護専門教科の講義と病院施設等での臨地実習が必須科目に課されており、膨大な学習量をこなしている。15歳から進路選択をしても、思春期の多感な時期であり、柔軟で個別的な指導を必要とし、生徒指導の教師力を求められる。鶴田は、看護科高等学校教員を対象とした研究の中で、教員の多くが「看護学生」として生徒に対応しており、看護学生と生徒と

の違いの認識が希薄であることを指摘している<sup>2)</sup>。また、臨地実習の場では、高等学校を終了した年代の看護学生であっても、高いストレスを感じ、不眠や不安感を感じることが示されており、特に臨地実習指導においては、高校生という精神的未熟さを考慮した指導が必要である<sup>3)</sup>。これらのことから、看護師として経験豊かな教員であっても、高校生という発達年齢に応じた指導や保護者対応の経験が少ないために困難さや戸惑いを感じていたものと考えられる。

一方、勤務して良かったと感じた項目として、生徒との信頼関係の構築ができたことや、臨地・臨床実習での効果的な指導ができたことが上位に挙がっていた。生徒への授業や生徒と接する中で、生徒理解ができ、教育者としての充実感を感じることができたものと考えられる。調査対象者が最も必要であるとしたものは教員としての研修ニーズであった。教員数が少ない多忙な職務の中で、教員としてより充実した授業や指導を求めているものと推測される。全国看護高等学

校校長協会は、「教職員生活全体を通じた教員の資質向上方策について」の意見の中で、看護教員の深刻な人材不足と人材確保の困難さを挙げて、社会人採用者を初任者研修受講対象とすることや、講習会の実施を求めている<sup>4)</sup>。このことから、調査対象者が看護の臨床経験を活かしてより充実した教育活動を行うためには、生徒理解や保護者対応、生徒指導に関する対応技術の修得が可能な研修を保証することが必要であることが示唆された。

## 7. 研究の限界

本研究は、A高等学校1校のみの調査であるので、今日の調査のみでは一般化はできないと考えている。今後、研修ニーズについての調査内容を再検討して調査対象者数や地域を拡大し、さらに研究を深めたい。

謝辞：本研究の調査にご協力下さいました高等学校の学校長および先生方に深く感謝いたします。

## 参考文献

- 1) 日下修一(2002)高等学校衛生看護科を看護高等学校専門学校に. *Quality nursing* 8(4)文光堂 p329-348
- 2) 鶴田百々(2013)高等学校看護学科における教科指導に関する研究—教員への調査を通して—.九州大学大学院教育システム専攻修士論文
- 3) 舟島なをみ(2010)3. 看護学教育の現状と展望. 日本医学教育学会 p131-134
- 4) 文部科学省(2012)6.全国看護学校校長協会「教職生活全体を通じた教員の資質能力向上方策について(審議のまとめ)」に対する意見[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo11/shiryo/attach/1323362.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/shiryo/attach/1323362.htm)